ネギま！を歩く～双子の兄でもネギじゃない～

十六夜哀音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま！を歩く～双子の兄でもネギじゃない～

【Ｎコード】
Ｎ５７３９Ｚ

【作者名】
十六夜哀音

【あらすじ】
ヲタクな俺は『ネギま！』好き。
死んだ記憶も無いのに、目が覚めたら赤ん坊！？
もう一人赤ん坊がいるみたいだけど・・・え？ネギ・スプリングフィールド？
どうやら俺はネギの双子の兄に『転生』してしまったようだ。
何故兄なのにネギじゃないっ！！
肯定的で否定的！？似非敬語で素を隠しながら生活する矛盾を孕んだ主人公が送る

『魔法先生ネギま!』の世界へようこそ・・・
※この物語は残酷な表現・アンチ?・ガールズラブ?等が含まれる可能性がありますのでご注意下さい。
尚、更新は不定期・ＰＣからの閲覧を推奨します。

1歩目～イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩く

目の前に広がるのは闇夜を染める紅蓮の炎と灰色の塊が多数。
辺りを炎に包んだ元凶は既に目の前にいる男に殲滅された。
地に倒れて足を失っているが出血はなく、その失った部分が灰色に染まった女の前に俺ともう1人の子供が守るように立ちはだかる。
俺と子供の目の前には元凶を殲滅した男がローブを身にまとい、大きな杖を持って立っていた。
その男は俺たちの方へと動き出す。
「お前達・・・そうかお前達が・・・お姉ちゃんを守っているつもりか？」
もう1人の子供・・・弟は初心者用の杖を掲げるも、近づく男に恐怖して肩を震わせて目を瞑る。
俺はそんな弟の前に立ち、両手を広げた。
そう知っていれば怖くない。男の手がこちらに伸びても怖がることもない、その手は俺と弟の頭の上に乗せられる手なのだから。
「大きくなったな・・・お、そうだお前達に・・・この杖をやろう。俺の形見だ・・・一本しかねぇけどな・・・」
そう言って、頭を撫でた男は俺にその杖を手渡すが、それを受け取った俺はすぐに弟へと杖を手渡した。
「お父さん・・・？」
そんな男の姿に弟は呟くが、俺から手渡された杖が重かったのだろうバランスを崩す。
「もう時間が無い・・・ネカネは大丈夫だ、石化は止めておいた。後はゆっくり治してもらえ。悪ぃな、お前達には何もしてやれなくて・・・」
男はそう言いながら空に浮かぶ。
「・・・お父さん？」
「こんなこと言えた義理じゃねぇが・・・元気に育て、幸せにな！

！」
彼は何を想って此処に来たのか、どんな想いで此処から去らなくてはいけないのか俺にはまだわからない。
そして飛び去る男の背中を「お父さん！！」と叫び続けながら地を走る弟の背を俺はこの目に焼き付けた。

「卒業証書授与・・・この七年間よくがんばってきた！だが、これからの修行が本番だ。気を抜くではないぞ・・・ネギ・スプリングフィールド君！」
「ハイ！」
ここはメルディアナ魔法学校。今俺の目の前では卒業式が行われている。
今名前を呼ばれたのは俺の弟であるネギ・スプリングフィールドである。
そして、彼を弟と呼べる俺はアルク・スプリングフィールド。つまりはネギの双子の兄である。
何故双子の兄なのに、ネギの名前が俺の名前になっていないのか不明ではあるが、推察するに俺が転生者（イレギュラー）であることが原因ではないかと考えている。
俺は自称『転生者』である。何故自称かととわれれば、テンプレートのように神様の失敗で死んだ→好きな世界に転生させてあげる上に君の欲しい理解不能能力（チート）をプレゼントしよう！などといった記憶が一切ないのである。
要するに、現実（前世）で眠りに落ちて目を覚ませば魔法先生ネギま！（物語）の世界へと紛れ込んでしまっていたのである。
紛れ込んだといっても、主人公の兄として生まれてしまったのだが・・・
『現実』の記憶を持っているが、『物語』の中に存在する身体であ

るアルク・スプリングフィールドが寝ても覚めても、ネギ(原)が主役の世界(作)に居続ける、夢から覚め(現実に戻らない)ないのであれば自身を『転生者』と表現してもおかしくはないであろう。
さて、よくあるテンプレ的なワンシーンの記憶が無いことから俺自身に『理解不能能力』はほぼ無いのではないかと考えているが、ネギの双子の兄であることから彼(か)の『千の呪文の魔法使い(サウザンド・マスター)』と『災厄の魔女』の子であるとも言え、魔力総量は弟と同程度の可能性がある。
更にはこの七年間で、弟と禁書庫に篭ることで『雷の暴風』のような中級魔法いくつかをなんとか使えるようになってしまった辺り、弟と同程度の頭脳(才能)や開発力を持っていると考えられる。
そのせいだと思うが『現実』の頃とくらべるとかなり物覚えがよかったりもする。因みにいくつかの上級魔法も使えはしないが覚えてはいる。
これらの事から、俺が持つであろう『理解不能能力』を強いて上げるのであれば『物語』の知識とネギと同程度の『才能』ではないかと考えている。
因みに『現実』ではそんなに料理をしなかったのに、この歳でかなり美味い料理が作れるし、家事等もなんなくこなせる。ナイフ投擲・ある程度の体術が使えるようになっていたりもした。
これらは『理解不能能力』の一端の可能性もあるが、それは定かではない。
どことなくそんな人物を『現実』の別の物語(作品)で見たことがあるような気もするのだが・・・
そんなことを考えていると不意に名前を呼ばれていることに気づく。
「・・・ク君!・・・アルク君!アルク・スプリングフィールド君!」
「・・・ハイ?」
「全く、君はまた考え事をしていたのかね?卒業式だというのに変わらないのう・・・」

その言葉にふと、周囲を見ると隣にいるアーニャは溜息を吐き、ネギはあわあわと慌てた表情でこちらを見ていた。
どうやら校長に何度も名前を呼ばれていたらしい。
考え事をしているとどうにも周囲の音が脳に入ってこなくなってしまうのは悪い癖である。
卒業式という長いようで短い時間にそんなことなど考えなければいいのではあるが・・・
ようやく俺は校長の前に立ち、差し出された卒業証書を受け取った。
そして、俺達の卒業式は終わりを迎えた。
ネギ・アーニャと共に廊下へ出るとネカネ姉さんが待っていた。
卒業証書に浮かび上がる修行の地の確認であろう。
アーニャはロンドンで占い師、ネギは日本で先生をすることであろう。
恐らくは俺も『英雄の息子』という名のネームバリューを持っていることから日本で先生をすることが修行内容として卒業証書に浮かび上がるであろう。
「ネギ、アルク2人共何てかいてあった？私はロンドンで占い師よ」
案の定アーニャはロンドンで占い師であった。
「今浮かび上がるところ・・・お？」
ネギがアーニャに答えると、卒業証書に文字が浮かび上がっているところだった。
俺も卒業証書を見ると文字が浮かび上がってくる。
『Ａ　ＴＥＡＣＨＥＲ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ（日本で先生をすること）』
それと同時にネカネさんとアーニャ2人の「えぇ～～～～～～～～～～！？」絶叫が廊下に響き渡る。
そして丁度前にいた校長に直訴を始めるネカネさんとアーニャ
「何かのマチガイではないのですか？１０歳で先生など無理です」
「そうよネギったらただでさえチビでボケで・・・」
確かにどう足掻いても年齢的にアウトだが、修行は修行だし麻帆良

ならなんとかなるだろうというか何とかなってしまうと思いつつ
「ああ、ネギも日本で先生をすることだったんだ。私も日本で先生をするのが修行内容みたいだ・・・もしかしたら一緒の場所で修行するのかもしれないね」
と俺が発言するとネカネさんとアーニャが若干だが大人しくなった。
前述にもある通り、俺は覚えもないのに何故か家事全般ができるので若干安心したのだろう。
まぁ中身が『子供におじさんと呼ばれる年齢（ハタチ過ぎ）』＋αの年齢なのだからできないこともない。
ただし年齢相応の身長・身体能力なので、稀にできないこともあるが。例えば、身長が足りなくて洗濯物が干せなかったりすることとかだ。
魔法を使えば出来ることではあるだろうが、修行先では魔法を秘匿して生活しなくてはならないので自身の身体のみで臨む必要性があるだろう。
そんなこともあるがある程度は家事ができるし歳の割に落ち着いているので、ネカネさんやアーニャからは特に心配されることもない。実際は、あまりにも落ち着きすぎていて心配されているかもしれないが、肉体年齢に精神が引っ張られているかのごとく稀にわがままを言ってしまうこともあった。
しかしながら、落ち着いているとは言えども肉体年齢は9歳であることには変わりはないので尚も校長に無理だと主張を続ける2人が居た。
「卒業証書にそうかいてあるのなら決まったことじゃ。『立派な魔法使い』になるためにはがんばって修行してくるしかないのう」
ネカネさんとアーニャの直訴も虚しく、校長からその言葉が出るとネカネさんが立ちくらみを起こして倒れてしまった。そして
「安心せい、修行先の学園長はワシの友人じゃからの。ま、がんばりなさい」
と言う言葉が続いた。

その言葉に元気に「ハイ！わかりました！」返事をするネギと唖然として立っているだけのアーニャ、そして倒れたネカネさん。
そんな光景が俺の目の前に広がっていた。
ネカネさんも大変だなぁ・・・等と思いつつもネカネさんを介抱する俺であった。

そして卒業から数ヶ月間ネギと共に日本へ行くための準備、日本語の勉強をしていた。
今は『転生者』である俺が日本語をネギに教える立場ではあるが、実は魔法学校での成績はネギの方が上である。
と言うのも、座学の成績は兄弟ともにトントンなのであるが、実技の成績は俺がネギの得意（光・風・雷）とする属性の魔法を使っていたため、ネギが主席で俺が次席という扱いになっている。
俺の得意属性は闇・氷・水とネギとは正反対でエヴァンジェリンとほぼ一緒の得意属性なのであるが、わざと成績を下げるためにネギの得意属性の魔法を用いてテストに臨んでいた。
これは今後の布石である。
俺は『転生者』であり、本来ならば『物語』には存在しない。
しかしながら、『物語』に『転生者』がいるのであれば何らかの副作用と修正力が働く可能性が考えられる。
そこで、弟の成績優秀さを俺より上に置くことでM（奴等）M元老院や学園長（ぬらりひよん）の目をネギに注目させることにしたのである。
ある種の生贄ではあるが『物語』とほぼ変わらないようにする為なのだから許せ・・・ネギ・・・と思っていたりもする。
が、結局主席・次席なので優秀な英雄（手駒）の息子達として目をつけられているかもしれないが・・・
因みに兄弟仲は良好である。
ネギの千（父）の呪文の魔法使いに対する思い入れは確かに歪んでいるよ

うに思えるが、年齢や環境から考察すると致し方ないものであると捉えることができる。
幼き頃から両親が目に見える範囲でおらずに伯（叔）父・伯（叔）母に預けられて生活していれば尚のこと、離れで子供二人で暮らしているということもかなり影響しているだろう。
そして母代わりに従姉のネカネさんがついていてくれたが、父に代わって叱ってくれる男の人がいなかった上に、村の人たちがネギに父の面影を見て叱らなかったことも影響しているであろう。
総じて、幼年期の子の精神を形成するのは周囲の環境であり、大人たちの態度であることからネギの歪みはネギだけの責任ではないと言える。
あまりの歪みっぷりに嫌悪感を抱く人間もいるかもしれないが、年齢や環境を考慮すれば自ずと受け入れることはできるのではないだろうか？
等とは言ってみるが、特に気にすることがなく会話して父親がどうこうという会話をして『俺』がいるということを認識させてやるだけでいいのだから。
まぁ、要するに親含めて大人が悪いんですよ。いくら愛していても、その思いが子に届いていなければ無意味なんだ。
そんなこんなでネギとは普通に兄弟をしていると思っている。
そういえば、ネギはやけに父にご執心だが母について気にしていないのは何故だろう？
先ほどの考察の如く、ネカネさんが親身になって面倒を見てくれていたからであろうか？
そのあたりは追々考えて行くことにしよう。
それとはまた別の要因として、俺が千の呪文の魔法使（サウザンド・マスター）いになりたいと公言していることも上げられる。
俺自身は『立派な魔法使（マギステル・マギ）い』になりたいと思っていないが、このように公言することで周囲の人間に誤認識させている・・・つもりである。

これのお陰で、ネギも俺が千(父)の呪文の魔法使いのような立派な魔法使いになりたいものだと認識してくれているようでやりやすい。
そんなわけで、特にコレといった問題も発生せずに兄弟仲良く卒業することが出来たのである。
気がつくと、ネギに出していた日本語の読み書きプリントが終わっていたので、今日の勉強を終えて部屋に戻ることにした。
・・・さて、次は日本での目標を考えよう。
麻帆良到着後のイベントを大きくわけると
1. 学年末テスト
2. 桜通りの吸血鬼
3. 修学旅行
4. 悪魔襲来
5. 学園祭
6. 魔法世界
この6つとなる。
とりわけ原作(介入)ブレイクをする気は無いが、要所要所、特にエヴァンジェリン一家や大河内さんが関わる部分では積極的に介入するだろう。
俺は大河内さん、茶々丸、エヴァンジェリンがすきなんだよ・・・
ハーレムにする気はないけど、好きな人くらい守りたいじゃないか・・・
まぁ、俺自身が『転生者』なので、既に『介入』しているのは否めないわけだが・・・
方針は基本ネギ任せで俺の知っている『物語』から離れすぎないようにフォローしていくことする。
好きな人らが巻き込まれるタイプの人なので、もしかしたら俺(新し)が主役の世界(い物語)になるかもしれない。
その時は、ネギと一緒に俺も成長していけばいいかと考えている。
今想像してもわからないのならば、前を見て先に進めばいいから。
そう結論付けて、俺は明日に備えて眠りに落ちた。

そして翌日、俺とネギはアーニャとネカネさんに見送られてウェールズをあとにした。
懐かしき極東の地、日本にある麻帆良へと旅立ったのである。

1歩目～イギリス・とある山奥の村・ウェールズ・メルディアナ魔法学校を歩く

初　連　載　開　始

一読戴き、気に入っていただければ幸いです。
感想・アドバイスありましたら是非。
誤字脱字はチェックしている心算になりやすいので教えていただけると嬉しいです。
５０００字～１００００字を目安に作成していきたいと思います。
※Ｒ－１５　ガールズラブ　残酷な描写タグについては自身の物差と他の方の物差の差を考えて保険としてつけています。

2歩目～日本・麻帆良学園都市・麻帆良学園本校女子中等部を歩く～

飛行機に長時間乗るのは『現実』も含めて初めてだったので、ネギと2人で耳抜きに四苦八苦していた。
『現実』ではもう少し肉体年齢が高い、丁度高校生くらいの時に初めて飛行機に乗ったのでそれほどでもなかったが、今の身体能力だと発着時にかかる重力（G）がそのとき以上に重くて案外驚いたりもした。
そんな俺を横目に、普段から魔法で身体能力を強化しているネギはピンピンしていて平気そうではあったが。
成田に到着して駅に向かう。
嗚呼、懐かしき日本・・・テンプーラ！スシ！ゲイシャー！フジヤーマ！！！なんて外国人かぶれなことは言わない。
決して俺は言わないぞ？隣でネギがはしゃいで言ってたけれども・・・
ゆらりゆらりと鈍行列車に揺られて千葉まで行き、千葉で東京行きの快速に乗り換える。
東京から中央線に乗って新宿へ行き、新宿で埼京線に乗り換えて麻帆良学園都市中央駅を目指す。
こんなところで『現実』世界の知識が役に立つのはありがたいことである。
秋葉原に寄りたかったが、あくまで修行に来ているのだから修行先への挨拶は優先されるべきであろう。
ネギはずっとソワソワしていたが・・・
日本には早朝に到着し、始発に乗って移動し始めたので麻帆良学園都市中央駅に到着するのは朝の7時～8時頃の予定だ。
学生ラッシュに巻き込まれそうである。
現に東京の通勤ラッシュに巻き込まれて人の山に埋まっている状態であるから確実であろう。
ネギは苦しそうにしているが、これはもう慣れるしかない・・・南

無三！！
因みに『原作』のようにネギは大荷物ではない。
イギリスから出発する前に本当に必要なもの以外はタカミチに連絡してタカミチの部屋に届くように送っておいたからだ。
準備中にネギが山ほど荷物を詰めていたときはあきれかえったが、何とか言い聞かせて極少量の荷物にすることが出来た。
しかしながら、父親の形見？である杖は手放したくはないようで渋々持たせている。
そのせいか周囲から奇異の目を向けられているのに、全く気がつかないネギは流石といったところであろう。
電車を乗り換えていくうちにだんだんと学生が増えてきた。
様々な学生服を着た男女が車両を制圧せんとなだれ込んでくるのだ。
一駅着くごとに車内はパンパンに膨れ上がるかの如く、人が増えるのだが・・・
そんな電車内で窓の外の景色を見ていると、『現実』でもお目にかかることはまずないであろう光景を目にすることができた。
電車は田舎のような風景を見せながら走っていたにも関わらず、突然都会のような景色が窓の外に映し出された。
そう、麻帆良学園都市に辿りついたのである。
初めての光景に目を奪われつつも、ネギの方を見やるとネギも顔に笑顔が張り付いていた。
これからするであろう修行に思いを馳せているに違いない。
麻帆良学園都市内部の駅に着くたびに学生が車内を出入りする。
中央に向かうほど、どんどん男子校生は下車して車内には女子校生ばかりが溢れかえる。
そんな車両内ではお決まりのハプニングが発生した。
ネギのくしゃみによるスカート（ラッキースケベ）めくりのつむじ風だ。
俺は認識阻害の魔法を自分にかけているので、よほど認識阻害に対する耐性がない人間じゃなくては視界に入らないであろう。
対してネギは認識阻害の魔法も使わずに、大きな杖などを持ってい

れば好奇心旺盛な女子校生に絡まれることは必至だ。
案の定絡まれてくしゃみしてスカートめくりするなんて・・・ネギよ・・・ＧＪ・・・なんて言ったら大間違いなんだよ！
スカートはめくれるよりもだな・・・絶対領域で見えそうで見えない方が・・・
おっと、少し熱くなりかけたか。ＢＥ　ＣＯＯＬ・・・
そんなことをしているうちにようやく麻帆良学園都市中央駅に到着した。
時間は８時少し前だった・・・
約束の時間は８時１０分頃だったが・・・！？
「ネギ！約束の時間に遅刻しますよ！」
「えぇっ！？」
そして走り出したネギを追いかける俺がいたが、身体強化をしていない俺と常時しているネギを比較すれば断然ネギの方が早く走るわけで・・・朝からヒィヒィ言いながら走りました。
やっと追い着いたと思えば、黒く長いしなやかな髪をした少女の傍らに赤い髪のツインテールの少女からアイアンクローを食らっているネギの姿があった。
近衛木乃香と神楽坂明日菜だ。
ネギがアイアンクローされていたのならば、きっと失恋するとか言ってしまったのであろう。
９歳児（子供）に女心や乙女心を気にしたり、知っておけ！と言うのは中々無理難題ではないだろうか？
今の俺にも結構難しいことなのではあるのだが。
「お久しぶりでーす！ネギくーん！アルクくーん！」
顔を合わせるのは久しいタカミチの声が聞こえてきたということは、いつの間にやら目的の場所である麻帆良学園本校女子中等部に到着していたようだ。
しかし、ネギを先に呼ぶあたり相変わらずのネギ贔屓な奴だがとおもうがいいやつなので気にしない。

このかとアスナがタカミチに朝の挨拶をすると同時にネギが反応していた。
「タカミチー！久しぶりー！！」
確かに俺たちにとってはタカミチはタカミチだが・・・先生になるからには業務中くらい高畑先生と呼ぶことをネギに覚えさせようと思っていると
「え？何？知り合い？・・・というか子供がもう1人増えてるわよ！？」
なんて言ってくれるアスナがいた。
「麻帆良学園へようこそ。いい所でしょう？ネギ先生、アルク先生」
そんなタカミチの言葉に驚くこのかとアスナを余所に、ネギは1つ咳払いをして自己紹介をしていた。
それに呼応するように俺も自己紹介をする。
「ネギの兄のアルク・スプリングフィールドです。同じく英語を受け持つことになると思いますので、もし授業を担当することになりましたらよろしくお願いしますね。ちなみに小さい子供ではありますが、私もネギも大学は卒業していますし大学卒業程度の語学力もありますので。」
当たり障りなく自己紹介をしながら、頭が良いんですよアピールをしておく。
女子中学生に何をしているんだか・・・と思わなくもないが、これは言っておいてやらないと駄目だと思うんだ。
ちなみに、大学卒業していると断言しているのは、卒業学校をオックスフォード大学であることにしろとメルディアナの校長に言われたからである。何故オックスフォード大学なのかは謎であるが・・・もしかしたらこの世界ではメルディアナ魔法学校は魔法の秘匿の関係上隠されたカレッジとして設立されている可能性が無きにしも非ずという愚考をしておく。
大学名も有名ではあるし、わかりやすいからでもあろうが。
自己紹介を終えてそんなことを考えていたところで、タカミチが校

舎から出てきた。
タカミチ曰く、俺とネギ2人でタカミチに代わって2－Aを担当するらしい。
実年齢から考えると2人で担当するというのは妥当なところではあると思えるが、労働基準法なんてなかったというレベルである。
まぁ、優秀な若人を使おうとする姿勢は認めてもいいかもしれない。
いや、俺は精神だけはそろそろおっさんなんだけどな・・・
突然アスナの学生服が脱げた。
どうやらまたまたネギがくしゃみをしてテンプレの如くアスナを脱がし(ラッキースケベ)たようである。
脱がし(ラッキースケベ)魔は伊達じゃないか・・・
先ほど脱いでおいたコートをアスナの肩にかけてやり、近くにいたこのかに何か着れるものを持ってきてもらうようにお願いしておいた。
アスナは恥ずかしさのあまり顔を赤く染めていたので、タカミチに軽蔑の視線を向けると即座に目を逸らしていた。
ネギはプンスカしているようだ。
先が思いやられることである・・・
ちなみにアスナはクマぱんだった。

学園長室に入るとぬらりひょん(学園長)が現れた。
取りあえず、今日から3月まで教育実習をしろとのことである。
「ところでネギ君かアルク君に彼女はおるかの？彼女がいないならどーじゃ？うちの孫娘(このか)なぞ」
等と学園長が供述すると、被害者(このか)に即座にとんかちで叩かれているあたり、一種の愛を感じた。
アスナが子供に先生は無理だの何だの喚いているが、学園長の決定だし覆ることもないだろう。

「ネギ君、アルク君。この修行はおそらく大変じゃぞ？ダメだったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじゃな？」
学園長の問いに俺とネギはＹＥＳと答えた。
むしろそれ以外に答えはあるのだろうか？あるかもしれないが、その答えを言ってしまうのはどうなのだろう。
そして今日からネギを担任、俺を担任補佐としていきなり授業をさせるようである。
流石学園長！俺たちに出来ないことを平然と言ってのける！そこに痺れないし、憧れもしないな。
先ほどからアスナが子供に先生など務まるわけがない的なことを言っているが、実は準備期間中に日本での教導カリキュラムを受けながら日本語の勉強をしていたため不備はなかったりする。
先ほども言った通り、労働基準法？何それ美味しいの状態ではるが、教育実習生としては手続きには問題がないのである。
学園長が指導教員であるしずな先生を呼び出すと、またまたネギが胸の谷間（ラッキースケベ）に顔を挟むをやってのけていた。
羨ましいけどそろそろ自重して欲しい。
まぁ、自重してもどうにもならないことではあるが・・・
「それともう１つあるんじゃが・・・このか、アスナちゃんしばらくネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえかの？まだ住むところ決まっとらんからの」
・・・？学園長が謎の言葉を発したので、質問をして見ることにした。
「あの、ネギはアスナさんとこのかさんの部屋に泊めさせてｍ「泊めないわよ！」あ、はい・・・まあ、そうでなかったとしても私も住居が決まっていないのですが、私はどうしたらよいでしょうか？」
卒業後の準備期間で問い合わせをしておいたが、住居はあちらが決めると言っていたのでもちろん住居探しはしていなかった。
ネギはアスナとこのかと同室になるのはわかりきっていたことであ

るから特に探す必要はなかったが、『転生者』である俺には部屋が割り当てられない可能性もあったというのに、面倒だったので住居を探していなかった俺にはこう当日になって問いかけることしかできなかった。
最初から探しておけばいい話なのではあるが、まあ何とかなるだろうと高をくくっていたのである。
「アルク君は今日の授業が終了したらまた学園長室に来なさい。その時に部屋の話をしようかの」
と言うことだったので了承した旨を伝えて、５人で学園長室を退室し、２－Ａの教室へと向かった。
アスナとネギは先ほどの脱げ事件や宿泊の件で２人して顔を合わせようとせずに明後日の方向を向いていた。
「ハハハ、可愛いものですね」
なんてつい、口にだしてしまうとしずな先生に笑いながら「２人も可愛いですけどね、アルク先生もかわいいですよ」なんていわれてしまい、それに同意するかの如くこのかにうなずかれてしまった。
しずな先生にクラス名簿を見せて貰っていたらアスナは捨て台詞のような言葉をネギに残してこのかと２人先に教室へと向かっていた。
ネギがアスナに若干の不満をもらすと、しずな先生がしっかりとフォローしていた。
先生とはやはりああいうことが出来る人のことをいうのであろう。
２－Ａの教室前に着き、中をのぞいてみると全員揃っているようであった。
ネギは初めてのことに緊張しているが、そんなネギを尻目に俺は大河内さんを探して目を泳がせていた。
そこでエヴァンジェリンと目があってしまった。
今は敵対する意思はないので彼女に向けて微笑んでおいて視線をそらしておいた。
今はネギがクラス名簿を持っているので手持ち無沙汰である。
どうやらネギの決心が固まったらしく、ネギが扉を開けて教室に入

ったところ扉の上から黒板消しが落ちてきて、常時展開している障壁にぶつかって黒板消しが宙に浮いた状態になってしまった。
教室が『ざわ・・・』つく前に、俺は即座に反応してその黒板消しを手にとると、ネギはそのまま前に進んでロープに引っかかって転び上から落ちてきたバケツに入った水をかぶった上に、とんで来た吸盤付の矢が刺さった。
個人的には黒板消しトラップにどうして引っかかってしまうのか理解できないが、ネギらしいのでいいんじゃないかな・・・と流すことにした。
いや、しかしまぁ微笑ましいものだ。
ネギがクラスメイトらに助け起こされると、しずな先生の合図で自己紹介を始めることに。
「ええと・・・あ、あの・・・ボク・・・ボク・・・今日からこの学校でまほ・・・英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです！３学期の間だけですけどよろしくお願いします」
「それで私g・・・「「「「キャアアアアアッかわいいいい～～～～～～～～～～」」」」・・・」
俺も自己紹介しようとしたら遮られた。
クッ・・・確かに俺は『転生者』だが・・・中身は彼女らよりも年上だが・・・これは堪えるな・・・
ネギがクラスメイトに揉みくちゃにされながら質問されまくっている。
しずな先生が窘める前に魔法で声量を大きくして叫んでもいいが、取りあえず魔法秘匿の関係から地声の最大声量で叫びを上げた。
「静かに！他のクラスも朝のＳＨＲ中です！みなさん席に戻りなさい！！」
すると、ようやく俺の存在に気づいたらしくネギを揉みくちゃにしていた生徒らがしぶしぶ席に戻っていった。
「さて、私も改めて自己紹介させていただきますが・・・私はアルク・スプリングフィールド。ネギ先生と同様に英語を担当すること

になっています。また、3学期の期間は教育実習扱いでネギ先生が担任、私が担任補佐をしますのでよろしくお願いしますね。」
クラスをみわたすと生徒全員がポカーンとした表情で口をあけている者までいた。
ちなみに伊達な眼鏡の千雨ちゃんは額に手をやって頭を抱えていた。
南無・・・
すると突然アスナが前に出てきてネギにつかみかかった。
どうやら先ほどの黒板消しが若干浮遊した状態になってしまったことに違和感を持ったらしい。
流石、『完全魔法無効化(マジックキャンセラー)』持ちの『黄昏の姫御子』といったところであろうか。
ぱっと見るとクラスの魔法(裏関係者)を知る人は特に気にしている様子はないが、アスナ同様に千雨も違和感を感じていたらしく、今度は腹を押さえて蹲っていた。南無南無・・・
机を叩く音とともにアスナを窘めるためにクラス委員長のあやかがしゃしゃり出てきた。
なんだか背景に花が見えるが・・・実はあやかも気とか使えるんじゃないの・・・?と思ってしまえる光景である。
流石犬猿の仲というか、アスナとあやかが取っ組み合いを始めたのでしずな先生が手を叩いて止めて、席に戻るように促した。
「それでは授業を始めたいと思いますが、初回の授業ですし改めて質問などを受け付けましょうか。ネギ先生または私について質問があれば答えますよ?質問のある方は挙手をお願いします。」
早速挙手したのは麻帆良のパパラッチこと朝倉和美だった。
2人の関係、年齢、出身地、学力の程度、そしてこのクラスで彼女にするなら誰がいいか?の5点を質問された。
「出身はウェールズの山奥の村・・・の出身で、10歳です。一応大学卒業程度の語学力はあります・・・。僕とアルクは双子の兄弟で出身校も一緒です。皆さんとても可愛いと思いますので誰がいいとは一概には言えないです。」

ネギの答えは流石というか、嘘も混ざっているが・・・なので俺も最後の質問に答えるのと同時に補足をしておく。
「正確には数えで１０歳なので、実年齢は９歳ですね。卒業した大学はオックスフォード大学です。彼女にするなら・・・というのは立場上では公に言えませんが、個人的に挙げるのであれば背の高い女性は好みですね。」
朝倉がメモを取りありがとうございますと言って着席した。
そして授業を開始した。
授業はネギが教壇の前に立って授業を進め、俺が教室を回ったり、後ろに立っている状態で行われる。
わからないことがあれば挙手してもらい、俺がその部分を教える形式をとった。
教壇の前では身長が足りないネギが黒板の上のほうに文字を書こうと背伸びをして生まれたての小鹿のようにプルプル震えている様は笑いを誘った。
あやかが台を用意してくれたのでネギはそのまま授業を進めていたが、アスナはアスナで後ろに俺が見ているというのに、先ほどの障壁が気になったようで消しゴムの欠片を何個も弾いてネギに当てていた。
注意？しませんよ、面倒くさい・・・まぁ、『原作』通りだから許容しているわけですけどね。
そして、あやかがネギに告げ口をして再度アスナと取っ組み合いになり、ネギはそれを止められずに初回の授業は終わった。
その様子を教室の後ろで見ていたら、青筋をピクつかせながら千雨が近づいてきて止めなくていいのかよ？とか言われたけど、どのようなクラスであるかというのが見たいので今日はこのままにする旨を伝えると渋々といった表情で席に戻っていた。

他のクラスでも２－Ａと似たような質問などがあったが、授業は滞りなく進んだ。
２－Ａはやはり特殊であると悟った1日であった。
『物語』の劇場なのだから当然といえば当然ではあるが、『現実』の頃では中々考えられないモノではないだろうか。
授業を終え、俺はネギと別れて学園長室へと向かった。
ノックして、俺が来た旨を伝えて入室許可が出ると共に入室すると1人の少女と1人の女性g・・・2人の少女が立っていた。
急に悪寒が走ったのは気のせいだと思いたい。
「アルク君の今朝の質問じゃが、ネギ君同様この2人の部屋に泊まってもらうことにしたからの。」
「出席番号１８番龍宮真名だ、よろしくアルク・スプリングフィールド先生。」
「・・・出席番号１５番桜咲刹那。・・・よろしくお願いします・・・。」
「お世話になります、龍宮さん、桜咲さん。私のことはアルクと呼んでいただいて結構ですよ。」
どうやら、裏関係者の方に回されてしまったようだ。
予想はついていたのでなんら問題はないが、刹那の警戒するような視線が痛い。
「そういうことじゃから、3人とも仲良くするように。あと2人はくれぐれもよろしくたのむぞい。」
大方裏関係であることを教えないように2人に釘を刺したのであろうが、俺は気にせずに2人と学園長室を退室した。
「ああそうだアルク先生、この後用事はあるかい？特にないのであればウチの教室でネギ先生と君の歓迎会をするようなんだが、用事がないなら教室へ行かないか？何、私達の部屋には歓迎会が終わってから案内さ、心配する必要はないよ。」
と龍宮に言われ、そういえば歓迎会があったな・・・と思い出した。
今頃ネギはのどかを助けてアスナに魔法を使っているところを見ら

れたところだろうか？
歩いて少しばかりすると、外からアスナのどでかい悲鳴が響いてきたのは言うまでもない。
龍宮と刹那の２人と教室へ入るとアスナ以外の生徒に歓迎された。
どうやらまだアスナとネギは来ていないらしい。
タカミチとしずな先生も歓迎会に参加しているようで嬉しい限りである。
２－Ａの生徒達と今朝の質問以外のことや、気になっている女性はいないのかなどさらに深堀するような会話などをしてネギとアスナを待っていた。
すると、ようやく来たようなのか再度歓迎用のクラッカーなどを持ち出してクラスメイト達はスタンバイを始めていた。
授業態度は非常識ではあるが、いいやつらなんだなと思える一瞬である。
ネギも合流して歓迎会は進む。
途中でネギとアスナが会話して、ネギがふらふらとタカミチの方へいって額に手を当てて読心術形の魔法を使っていた。
その結果がノーパン・くまパンなのはなんだかなーと言ったところではあるが・・・タカミチ・・・お前それでいいのか・・・？
結果を聞いてアスナが教室を飛び出していったようだ。
まぁ、ネギがなんとかするだろう。
しかし、俺に何も相談してくれないだなんて・・・お兄さん悲しいよ・・・
俺の歓迎会でもあるが、ネギの歓迎会でもあるのでネギとアスナをクラス全員で探すことになった。
その後、ネギに告白するアスナの姿を何人かのクラスメイトが目撃してあやかとアスナの取っ組み合いが再発し、止めるといったパターンに入りそのまま歓迎会はお開きとなった。
歓迎会もお開きになってしまったので片付けを手伝って、俺は龍宮と刹那に案内されて女子寮の部屋へと向かった。

2歩目～日本・麻帆良学園都市・麻帆良学園本校女子中等部を歩く～　（後書き）

独自解釈として、準備期間中に教育実習に行くためのカリキュラムを受けたこと、卒業がオックスフォード大学とあることから秘匿されているカレッジではないかという愚考として挙げています。書類上では別のカレッジで学習したことにされているとは思いますが・・・

お気に入り登録を早速されていたので非常に嬉しいです。
更新速度はマイペースに速かったり遅かったりすると思いますのでご了承ください。

最後に主人公名前の由来を・・・
ネギはナギの母音を変えただけだったので、アリカの母音を変えて名前をつけようとしましたが、アルカとかアリクとかアリスとか残念だったり女の子のような名前ばかり出てきてしまったので、取りあえず『ア』をつけようと思ったら、アルクという名前になりました。
『ア』をつける→アルクだ！という思考回路は意味不明なところがありますが、決まったんだしいいかな・・・と。
こんな感じです。
今後幾話かはこんな設定裏話なども掲載していく予定ですのでお付き合いいただければ嬉しいです。

読みやすいモノを書いていきたいので、感想・アドバイスなどありましたらお願いしたいところです。

3歩目～女子寮・麻帆良学園本校女子中等部2－Aを歩く～

龍宮・刹那両名の部屋に着き、部屋に入れてもらって3人でテーブルを囲んで紅茶を飲んでいるのだが、相変わらず刹那の視線が痛い。
『現実』ではハーブティーなどを嗜む程度であったが、どういう訳か『転生』してから紅茶の知識がかなりあるので、俺が選んだオススメの茶葉で紅茶を淹れた。
紅茶を飲んで貰えば少しは視線も和らぐかと思ったが、そうでもなかったようである。
「そういえば、お2人は普段夕食などはどうされているのですか？」
空気に耐えられず、話題を振ると2人とも本当に簡単なものを作って食べるか外食だったり、弁当や惣菜などで済ませているらしい。
それならと、またもや『転生』してからやけに出来る料理の腕を披露すべく冷蔵庫の中身を見せて貰ったのだが・・・殆ど何も入っていないだなんて普通じゃ考えられないよ！
何をもって普通と言うのかはよくわからんのだが。
仕方がないので夕飯の材料買出しに行くことにしたが、スーパーの場所もわからないのでどちらかに付き添ってもらい、もう1人には米を研いでもらうことにした。
・・・付き添いは刹那らしい。
刹那でいいけどマジでその警戒をといて下さい、生きた心地がしません・・・
無言でスーパーまで行って、夕飯の材料を購入して、荷物は俺が全部自分で持ってまた無言で寮まで戻る。
実際は荷物を持つ持たないなどの言い合いがあったのだが、女性に持たせるのも難なので断って全部俺が持つことにしたのであるが。
寮について早速カレーを作り始める。
『現実』ではそこまで料理も上手くなかったがカレー好きだったこともあり、カレーだけは市販のルーを使って結構作ることが多かっ

た。
日持ちするので2，3日はカレーになるが、1週間カレーだったこともある猛者なのでなんら問題ない。
野菜を一口大に切って煮込み鳥の腿肉を蒸し焼きにする。
ある程度煮えて来たら、腿肉を適当な大きさに千切って鍋に投入。
辛口と中辛のルーを入れて混ぜ煮込む。
さらに煮えて来たらチョコレートと牛乳、コーヒー豆とバジルを少々入れてまだ煮込む。
とろみが出てきたら辛めのコクのあるカレーの出来上がり。
出来上がるまでに時間がかかってしまったが、2人に美味しいと言ってもらえたので満足である。
2人とも一口食べて愕然としていたのには笑ってしまったが。
それでも刹那の警戒心が解けないあたり、3年の修学旅行までこんな感じですごさないといけないかもしれない。
そう考えると辛いものがある、魔法のことを話た方が気は楽になるだろうが、学園長や本人たちから魔法関係者(裏)であると聞かない限りは話さない方が無難であろう。
まだ1日目ではあるし、今後に期待と言ったところだろうか・・・
夕飯も食べ終わり、後片付けも済んだところで風呂に入ることに。
2人は大浴場に行くらしいので毛布だけを先に借りておいてさっさと風呂に入り、毛布に包まってさっさと床で寝た。
朝目が覚めると、枕代わりかクッションを置いてくれたらしい。
2人はまだ寝ているようなので、洗面所で着替えて朝食の支度をする。
炊飯器をセットしたら、外に出てこの周辺を走ってくることにした。
俺の朝は早い。
身体強化を常時展開していては基礎体力が上がらないので、基本的に用いず早朝に走るという習慣をつけておいた。
『現実』の頃はやらなかったが、この世界ならやっておいて損はないと思い今まで続けている。

そのおかげか、本来の同年代よりは体力があると思っている。
魔法で強化しているネギには普通に負けてしまう程度ではあるが・・・
・
外に出ようと玄関口へ向かおうとしたら、首筋に刀を当てられた。
刹那さんマジでやめてください死んでしまいます・・・この辺りを走りに行くだけだと伝えて逃げるように部屋を出た。
あの2人のことだから、俺が起きて朝食の準備をしている音で既に目を覚ましただろう。
少し悪いことをしたかもしれないが、大丈夫だと思いたい。
小一時間ほど走って部屋に戻ると龍宮だけが部屋にいた。
どうやら刹那も朝の自主練習をしに行ったようだ。
朝食は出来ているので食べたくなったら取ってくればいい旨を伝えてシャワーで汗を流す。
風呂から出たらスーツに着替え、朝食を摂る。
刹那はまだ帰ってこないらしいので、龍宮と2人でささっと朝食を食べた。
食べ終えた頃には刹那が帰ってきて、今はシャワーを浴びている。
テーブルに刹那の朝食を準備して先に学校へ向かう旨を龍宮に伝えて、駅へと向かった。

2日目ではあるが、まだ初授業のクラスもあったので昨日と同様に簡単な自己紹介といくらか質問を受けて一日の授業を終えた・・・
訳もなく。
朝から2－Aの授業でネギがアスナを指名して、英文が全く訳せないことを馬鹿にしてしまい教室を騒がせた挙句に、くしゃみで脱がしたのである。（ラッキースケベ）
そういえば、ネギにマスクを付けさせてた状態でくしゃみが出たらマスクは吹き飛ぶのだろうか・・・なんてことを考えながらその日

もその日で彼女らを見守っていた。
また訳のわからない光景を見せられた挙句、後ろで何もしない俺を見て頭を抱えていた千雨は何も悪くないが、良く効く胃薬とリラックス効果のある茶葉でももっていってあげようと思う。
放課後になるとネギがどうしてそんな色になったの？と聞きたくなるような液体が詰まった太目の試験管にコルクで封をしたものをアスナに持ってきていた。
恐らくホレ薬であろうそれをネギがアスナに飲ませられる前にレジストの呪文を唱えておく。
すると案の定、ホレ薬を飲んだネギの顔を見たこのかやあやか、チアリーディング部の３人がそろってネギに惚れてしまった。
脱兎の如く逃げ出したネギを追いかける４人を追いかけることに。
離れた場所から刹那のものすごい殺気の篭った視線を感じたが、気のせいだったことにしたい、させてください。
どうやらネギは逃げ切ったらしく、フラフラしていた４人にレジストの魔法をかけたが、副作用か少々惚けているようだ。
やはり、離れた場所からこのかを見ている刹那から発せられる殺気が俺の身を焼きつけるのでなんとかしたい。
部屋に戻ったら確実に刹那に何かいわれるであろうと予測しながら、４人に帰宅を促して俺は職員室へと戻り残った仕事を片付けた。
仕事を終えて寮に戻ると、案の定刹那に文句を言われた。
やれ惚れ薬を飲ませるのはどういうことなのか、全く魔法を秘匿する気がないのではないか等々・・・正直俺に言われても困るようなことばかりを延々と垂れ流していたので、反論することに。
「ところで桜咲さん・・・魔法ってなんですか？」
刹那にこう問いかけると、急に押し黙ってしまった。
ネギが魔法を使っているのを見た以上、俺も魔法を習っていて使える可能性は高い。
しかし、本人が魔法を使っていることを言っている訳でもなく、レジストくらいしかしていないのに魔法の話をしてしまうのは如何な

ものかと。
百聞は一見にしかずという諺もあるが、刹那の目の前で俺が魔法を行使していない以上、魔法の秘匿に関する話をしてしまうのは自分が関係者ですよと言ってしまっているようなものである。
それに、双子だからといっても必ずしも同じ学校で同じ教育を受けたとは言い切れないからである。
実際は同等の教育を受けた魔法使いではあるが、それがはっきりとしていない以上は口に出すべきものではないのだ。
このかが心配なのはわかるが、人に当たるのはよくないだろう。
確かにネギは俺の弟であるから注意を促して欲しいと遠まわしに言っているのだと思うが、人間素直にハッキリと言われたほうがわかりやすい上にその方が良い場合もあるのだから。
「ふぅ・・・まぁ今の話から桜咲さんと龍宮さんが関係者であることはわかったので言わせていただきますが、私も魔法使いですよ。確認が完全に取れてからそういった話をしたほうが良いのではないでしょうか？もしかしたら私は魔法使いではなかったかもしれませんしね。」
少女を相手に大人気ないことをしてしまったので白状したが、これに懲りてくれればもう少し大人しくなるだろう・・・そう思っていた日が俺にもありました。
刹那さんの目が非常に厳しいです、目の力だけで人が殺せるんじゃないかと思うくらいイラついた表情でこちらを見ていました怖いです・・・
龍宮がなんとか沈めてくれたのでよかったですけれども。
その後は初日と同様にカレーを煮込んで夕食にし、2人が大浴場に行っている間に食器を片付け、風呂に入って毛布に包まって先に寝た。
次の日も前日同様の行動を取っていたのだが、自主練から帰ってきた刹那に今度は大浴場でネギが魔法を行使したと朝から俺に盛大に愚痴って来た。

俺に一体どうしろと言うのでしょうか？ネギに注意をしろと言うことですねわかります。
２日連続でこれでは本当に先が思いやられるものである。
３日目も滞りなく授業が進んだが、タカミチが以前から２－Ａで特に学力の低い５人であるくーふぇ・楓・まき絵・ゆえ・アスナに居残り授業をしていたらしく、ネギがその居残りを引き継ぐと言い出したので手伝うことにした。
小テストを行って合格点以上の点数が取れた人から解散する形を取っていたが、一発でゆえが抜けて数回の説明でくーふぇ・楓・まき絵が抜けたのに対して何度懇切丁寧に説明してもアスナは合格点に辿りつかなかった。
んー・・・この頃の英語なら単語と文法を覚えるだけでなんとかなったと思うのだが・・・苦手意識があるのかどうにも覚えられていないようだ。
実際は記憶を消した時の後遺症かもしれないが・・・
途中でタカミチが姿を現してアスナを励ましていったが逆効果、アスナは教室を飛び出してしまった。
タカミチはあとでグーパンだな・・・アスナはネギに任せて、俺は職員室に戻って仕事を片付けた。
帰宅後はテンプレートで翌日となった。
日々代わり映えはしないのだ。

４日目になるとどのクラスも授業に慣れて問題なく授業を進めることができたが、一部例外だけは除いて欲しい。
昼休み、職員室にいるとまき絵と亜子が乗り込んできて暴力を受けて怪我をしたなどと騒いでいたので静かにさせる。
あー・・・高校生と争っているのか・・・高校生レベル低いな・・・
なんて考えながらネギに俺が行く旨を伝えて外に出るがネギも着い

てきた。
現場につくと、アキラが英子のアタックを受けていたので少しキツめに叱ることにする。
「はいはい、そこまでですよ。年上が年下をいじめているようにしか見えませんからその手を離しなさい。」
が、ダメッ・・・こちらに注意を向けることが出来たが女子高生共に囲まれてしまった！
「アルク君・・・」
とアキラに名前を呼ばれて少し惚けてしまったのが仇となった。
女子高生に揉みくちゃにされるのは役得ではあるが、アキラがいる手前抜け出したい気持ちのほうが大きかったりもする。
「いい加減におよしなさいおばサマ方！！」
声とともに飛んできたボールが英子の頭に当たり、そちらを向くとアスナとあやか、それにネギが居た。
応援を呼んでくるのはいいが、生徒を連れてくるとは・・・これが修正力か・・・などと思いつつ、言い争いをする3人の間に割って入る。
1日目と同様に地声の最大声量で叫ぶことで場を一時凍らせ、発言する機会を得た。
「さて、何故このような状況に陥ったか説明してもらえますか？といっても聞いていた限りでは、先に使っていたウチの生徒が居る場所に割り込んできてかすり傷ながらもそちらの女子高生の方々が怪我をさせたと。そちらの方々はどういうことかわかりますか？」
そう言い切ると、主立っていた英子が黙ったので今度はアスナたちを叱る。
「さて、それについては謝っていただかなくてはなりませんけどね。神楽坂さんと雪広さんは何故ボールをそちらの方にぶつかるように投げたのですか？私を助けようと思ってやってくれたのかもしれませんが、まず先にすることがあるのではないですか？話を聞いてもらいましょう。暴力に訴えることは良くない手段ですよ。当然そち

らの方々についてもですけどね。」
その場に居た全員が苦い顔をしていたので双方謝らせてその場を終わらせた。
どちらも渋々だったので、ウチのクラスの2人には再度厳しくその場で叱っておいた。
理解してくれはするだろうが、いつもの雰囲気がアレなので口より先に手が出るだろう。若しくは同時か・・・
そんなこんなでその場は治めることが出来た。
5限目は授業もなかったので職員室にいたが、体育の教師が急用で帰ることになり代わりに授業を見ることになった。
ネギと一緒に屋上のバレーコートに行くと、昼休みの女子高生達が居た。
どうやら自習だったので、レクリエーションでバレーをするらしいが・・・酷い嫌がらせである。
彼女らは俺が来たことに少しばかり嫌そうな顔をしたが、ネギを見ると一変昼間の俺のようにネギを囲み揉みくちゃにしていた。
助けませんよ？後ろがざわついているし、2－Aのクラスメイト達がやってくるだろうから。
昼は俺が場を治めたので、ここはネギに任せよう。
どうせネギがどの程度教師が出来ているかを見ようと、タカミチが来るだろうし。
昼休みも来ていたかもしれないが、俺は気配探知なんてできないし目にはいる範囲にも居なかったのでなんとも言えない。
気がつくと、昼休みに言ったばかりにも関わらずまた暴力に訴えようとしているアスナ達の姿があった。
が、ネギのくしゃみ（ラッキースケベ）が発動してその場を止め、俺が昼に言っていた通り暴力は駄目だからスポーツで解決しようということになった。
何故かネギも参加するようだが・・・
「はい、そこのチアリーディング部3人はいつの間に着替えたんですか？応援もいいですけど授業中ですから静かにしてください。絡

繰さんも、授業中ですよ？運動会ではないのですから花火なんて上げないように。他の方は静かに見学していてくださいね？」
残ったメンバーの注意をしているといつの間にか試合が始まっていた。
女子高生チームを何人か減らしたようではあるが、こちらも大分人数が減っていた。
狭いコートに大人数が入ればそうなってしまうのは致し方ないのではるが。
というか千雨も何気に参加してるね、よかったよかった。
三角攻撃（トライアングルアタック）によりあやか含めて数人がアウトになると、今度は太陽を背にしてボールを投げる太陽拳なんて技を使ってきた。
君達本当に女子高生なの？と言いたくなるくらいの厨二っぷりであるが気にしてはいけない。
アスナに2連続でボールをぶつけて怪我をさせていたが・・・まぁ、これは後で説教だな。
それを見てネギが魔法を使おうとして詠唱し、強めの風が吹いてきたが途中でアスナに止められた。
はい、刹那さんこっちを見ないでください、ネギを見てくださいお願いですからその視線を俺に向けないで下さい。
主力が抜けてしまい、落ち込んでいる生徒を激励するネギは中々いい感じではあったがまだまだである。
律儀に待ってくれている女子高生達も中々であるが。
ネギの激励のおかげか、生徒達もやる気になって勝負に挑んでくれたのはいいが、先ほどの女子高生以上の反則技を駆使して時間終了となり勝利していた。
が、諦めの悪い英子が試合を終えて気を抜いているアスナに向かってボールを投げた。
説教追加だ・・・ボールはアスナに向かっていたが間にネギが割って入り、ボールを受け止めて暴走した魔力と共にボールを投げ返した。

脱げた。
もう何も言うまい・・・あと刹那さんはその視線をですね・・・天丼はもういいですから本当にお願いしますよ・・・
脱げた3人にはたまたま持ってきていたコートにネギの上着と俺の上着を羽織らせてやったが、下はどうしようもないので今は諦めてもらう他ない。
そのまま負け犬の遠吠えを吐いて帰ろうとしていた女子高生達を捕まえて説教した。
それの横では2－Aのクラスメイトがネギを胴上げしていた。
全く何をしているのだか・・・まぁそんなことがあってもいいのではないだろうか。
いや、実際は良くないのではあるが・・・
そんなこんなで今日も無事?に仕事を終わらせることができたのであった。

3歩目～女子寮・麻帆良学園本校女子中等部2－Aを歩く～　（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
この時期は時間があるので、筆が進む限り早い更新ができるかと思います。

今回の設定裏話はタイトルについてです。
最初は『英雄の息子達』～双子の兄でもネギじゃない～というタイトルでしたが、主人公の名前がアルクになったことと、転生した主人公が『魔法先生ネギま！』のストーリー（ストーリー）の流れに沿いながら、話を進めて行くことから、道を歩く（進める）と言う意味合いを掛けてネギま！を歩く～双子の兄でもネギじゃない～というタイトルにしました。
要するにギャグです。
寒い・・・

無事に1巻を終えることが出来ました。
この量は多いのやら少ないのやらですが、読んでくださりありがとうございます。
感想・アドバイスや誤字脱字の発見がありましたら教えていただけると嬉しいです。

４歩目～図書館島を歩ｋ・・・歩かない！・麻帆良学園都市は少し歩く～（前書

感想いただきました。ありがとうございます。

４歩目～図書館島を歩ｋ・・・歩かない！・麻帆良学園都市は少し歩く～

どうにもネギの魔法秘匿意識が薄いのでやんわりと伝えておくことにする。
世話になっている刹那の視線が痛いのと、ネギが何かをやらかす度に小言を言われるのが面倒だからである。
ネギはきょとんとしていたので効果は薄そうではあるが、もうそろそろ多少は悔い改めてくれるであろう。
麻帆良に着てから約一ヶ月が過ぎようとしている。
学生達は学年末試験が近いせいか、大分ピリピリしている様子が見受けられるのであるが・・・我等２－Ａのクラスメイトらは全くピリピリしておらずにいつもと変わらない日々を送っている。
エスカレーター式の学校ではそんなものなのだろうか？いや、別のクラスはピリピリしているのだから、２－Ａの生徒だけがこんな感じなのであろう。
全くもってどうしようもない・・・まだ、学園長からの教育実習最終課題が出ていないが、どうせ最下位を脱出させることが課題になるであろう。
しかし、教育実習の課題をクリアできなかったらクビで、クリアすれば採用とはどこのブラック企業かと小一時間問い詰めたいところではあるが、そんな時間を使うならトレーニングするほうが何倍もマシである。
その日も授業は滞りなく進み、残るは２－ＡのＨＲだけとなった。
俺とネギは職員室にいたので、裕奈と桜子が呼びに来た。
２－Ａに向かう途中、他のクラスがピリピリしていることにようやく気がついたネギは学期末テストのことを知らなかったようで驚いていた。
そこへしずな先生がやってきて俺とネギに学園長から渡すように言われたという課題の入った手紙を持ってきた。

中を見てみると『ねぎ君とあるく君へ　次の期末試験で二ーAが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。　麻帆良学園学園長近衛近右衛門』と書かれた紙が出てきた。
どうやら俺はブラック企業に就職内定を貰ってしまったようです・・・辞めたい・・・。
簡単そうだとのたまうネギを尻目にバカ五人衆（レンジャー）＋このかが消えた後のことを考えている俺がいた。
HRは勉強会をすることにしたネギが主語を抜いてお話してくれたので、余計な不安を煽ることになるのだがこんなところでは楽観視しておくことにする。
桜子の提案である英単語野球拳をネギが許可してしまったので俺はそっと教室を出た。
助けを求めるような目で千雨が見ていた気もするが、そこは気にしてはいけない。
ちなみにこの前リラックス効果のあるハーブティーの茶葉やカロリーの低い手作りのケーキを持ってお話を聞いてあげたら少しだけ仲良くなれた。
その日は会話って大事だなと思える一日となった。
職員室に戻ってこの日のために作成しておいた小テストを手に取って、また2ーAへと向かった。
教室はまだ騒がしかったが、バカレンジャーも服を着ていたので教室に入り、持ってきたテスト用紙を配布して残り時間いっぱいまでの小テストを開始した。
・・・今日の授業も終わり、先ほどの小テストの採点をしているのだが・・・本当にバカレンジャーの成績は酷い。
居残り授業などもあれから何度かやってはいるが、勉強というのはすぐに効果が出るものでもない。
すぐに効果が出る方法もあるだろうが、結局はそれも継続しなくては殆ど意味を成さなかったりするのでなんとも言えないのである。
半月前から既にテストは作成を開始していたため、殆どテスト問題

は出来上がっているのでそれほど仕事量も多くなかったので早めに上がることが出来た。
ちなみに、ネギも途中までテストの採点をしていたが魔力を感じなかったのでどうしたのか聞いたところ、３日間魔力を封印したようである。
安心と言うべきなのかどうなのやら。
寮に戻れば今日も今日とて２人に夕飯を作る。
刹那は未だに警戒をといてくれないが、食事に関してだけは信頼してくれたようで女性としては少し多めに食べてくれるのでこちらとしても作った甲斐があるものだ。
そして、いつもどおり２人は大浴場へ行き、俺は風呂を済ませて寝るだけだったのだがバカレンジャー達があらぬ噂に惑わされている可能性があるので龍宮達の帰りを待っていた。
やはり、最下位のクラスは解散のうえ特に成績の悪かった人は留年どころではなく小学生からやり直しにさせるなどといった非常識なものであったのだが、ゆえが話た図書館島の最深部に『魔法の本』あるというこちらも胡散臭い噂を信じたアスナが力の限り握り締めた拳を胸に図書館島へ行くと宣言していたのを見ていたらしく、確信が持てた。
教えてくれた龍宮には明日にでも餡蜜を作ってやろうと思った。
ちなみにベランダで星を眺めている振りをして寮の出入り口付近を監視していたところ、バカレンジャー＋図書館探検部＋ネギの８人が出て行くのを確認してさっさと寝た。
翌日、朝からクラスは騒然としていた。
裕奈と桜子が最終課題である期末テストで２－Ａが最下位脱出しないと俺もネギもクビになってしまうことをばらしてしまったからである。
さらに追い討ちを掛けるようにネギ＋バカレンジャー＋このかが行方不明になったとハルナとのどかが教室に駆け込む形で叫んだので尚更騒がしくなった。

が、俺は平然として朝のＳＨＲを始めようとしたら非難の声が上がった。
ネギは心配じゃないのか？とかバカレンジャーはどうするの？とか。
「本来ならば警察に連絡して捜索願を提出して捜索依頼をするところですが、ネギも一緒であるなら何処にいるかの当てがあるんで心配してないんですよ。テストの日には戻ってくるみたいなので皆さんは追い上げるように勉強をしましょうか。じゃあ出席を取りますね・・・」
まだ不満の声は上がっていたが、スルーしてＳＨＲを終えた。
そういえば、２－Ａは３１人のクラスとして認識されているわけだが、さよちゃんは幽霊だしテストも受けられないのであるから普段のテストの平均点はどのように算出しているのであろうか？
『物語』の知識から推測するに、テストを受けなかった人などは０点扱いで合計点を算出して、それを３１で割っているのではないだろうか？
仮にさよちゃんが教科合計が３１点だったすると、それだけでも平均点は１点変わるわけである。
つまり、今まで最下位であったのももしかすると平均点の算出者に問題があった可能性が見えてくるのだがどうなのだろう。
さて、今日も恙無く授業を終えたのではあるが、２－Ａだけは居残り授業と言う名の勉強会を全員でしている。
俺だけでは教える立場の人間が少ないので上位組み４人と１００位前後の２人にも手伝ってもらい勉強を進めている。
上位組みは人にモノを教えながら再度自分の知識を確認してもらうことに主眼を置き、他のメンバーはわからないところを教えて貰いながら進めて行くことで知識を増やすことに主眼を置いている。
また、勉強は英語のみではなく他の教科のどれでもやっており、特に最も苦手な教科の勉強をするようにしてもらている。
これは得意分野を勉強しても取れる点数は数点～多くても十数点しか増えない可能性が高いが、苦手な分野に絞って勉強することで普

段よりもさらに多く点数をとることによる平均点の底上げを狙った勉強会なのである。
極端な例を挙げると、数学が得意で普段から８５点くらい取っていたとしても、勉強して１００点とった場合には＋１５点にしかならない。
しかし、国語が苦手で普段は５０点くらいしか取れなかったが、勉強したことで８０点取れた場合には＋３０点と２倍にもなるのである。
特に社会の歴史や地理などはただ記憶するだけでいい上に出題範囲も決まっているので、いくら社会が苦手な人でも覚えてしまえばかなり高得点を狙えるのである。
一人当たり教科合計が３０点プラスされるだけで平均点は１点上がるので短期間で対策するならば得意よりも苦手をとるべきだと俺は考えている。
しかし、これはある種の博打に似たようなものなのであまり薦められるべき手法ではないかもしれない。
それにしても、エヴァはともかく茶々丸の成績が悪いのは何故だろう？
ガノノイドだし、データ検索なども単体でできる優れたロボットだというのに・・・手を抜いているのだろうか？
２－Ａの生徒は潜在能力（ポテンシャル）が高いのでもう少し真面目に取り組んでくれれば最下位に甘んじていることもなかったであろう。
翌日も同様に勉強会を開催して、本番を待つだけとなった。
テスト当日バカレンジャー＋図書館探検部＋ネギが遅刻してやってきた。
ネギについてはもう何も言うまい・・・と言うより何を言っても仕方がない。
主人公だからな！で片付いてしまうから怖いところである。ただし、俺の中だけであるが・・・
新田先生に連れられて、遅刻者は別教室へと向かっていたが、新田

先生の対応は本当にそれだけでよかったのか・・・？と思える対応である。
そっと遅刻組みの教室を覗きに行くと既にネギも着ていて、気分をリフレッシュさせる魔法を使っていたが俺以外は誰も気がついていないので見なかったことにする。

テストも終わり、成績発表日になった。
主にネギの命運がかかった発表日であるが、『物語』の知識がある以上焦ることもないし、俺に出来ることはしておいたので悔いもない。
ちなみに食券トトカルチョは２－Ａが１位の一点買いの所持食券全賭け余裕でした。
俺がクラスメイト全員に料理を振舞ってもいいが、面倒なので何か奢ってあげよう。
頑張った御褒美として。
そして順位発表があったが、案の定最下位であった。
ショックを受けたネギは外へ走り出し、何故か大荷物を持って駅へと向かっていった。
俺を置いていくなよネギ・・・お兄ちゃん悲しいよ・・・
ネギは俺のことを忘れているんじゃないかと稀に良く思うことが多々ある。
仕方がないので追いかけると、ネギは駅の改札付近でアスナに捕まっていて他のバカレンジャー＋図書館探検部の面々と学園長に囲まれていた。
学園長が遅刻組８人のテストを別途採点していたので２－Ａクラス総合得点に足されない状態で平均点を算出したと白状していた。
やはり、算出者がおかしいのは正解だったようである。
今回のテストでは確実に２２人の総合得点を３０か３１で割った結

果であったろうし、以前のテストもさよちゃんの合計点数を０として数えて３１で割っていた可能性も高い。
なんとも酷い仕事をしているので、やっているのが生徒でない限りはそいつに仕事を任せないほうがいいとおもう。
むしろそいつをクビにした方がいいんじゃないか？と思ってしまう次第である。
あと、野次馬が集まってるのにテストの平均点を駅の改札前で発表するのはやめましょうよ・・・他の人の迷惑です。
ついでに個人情報の流出ですよ？認識阻害結界のおかげで麻帆良だから～で済むかもしれないけれども。
そんなこんなで、結果は変わって逆転トップになり食券を儲けることもできて外食するのにも困らなくなったし、ブラック企業に就職が決定した。
よかったよかった。
魔法書の効果ではなく、自力で学年トップになった事実を目の当たりにしてネギも魔法に頼りすぎずに自らの実力で結果を得ることを少しでも意識してくれればいいのであるが。
そしてネギは８人に胴上げされていた。
ネギだけでなく、２－Ａの生徒にも忘れられているんじゃないかと最近良く思うことが増えてきたりもする。
教室に戻り、みんな頑張ってくれたので今日明日にでも全員に御褒美としてご飯を奢るという旨を伝えると喜んでくれた。
龍宮と刹那は若干不満そうな顔をしていたが・・・
ちなみに俺の料理の味の評価は龍宮曰く五月（超包子）や超並かそれ以上とのことだった。
なら、超包子並みの飯屋にでも連れて行くことにしよう。

４月からの正式採用も決まり今月の行事は終了式を残すだけとなり、

日々は過ぎて終了式の日になった。
終了式では俺とネギが４月から正式な英語科教員として、３－Ａの担任・副担任になる旨が伝えられた。
教室に戻ると、クラスメイト達がネギにのみ注目しており結構寂しい思いをしたり。
仕方ないので俺は教室全体を眺めていたら、千雨が若干下を向いてプルプルと肩を震わせていた。
あれはきっと胃にきているのであろうから、後で茶葉とお菓子に胃薬を持って部屋に行こうかと思う。
そんなことを考えていたらいつの間にか『学年トップおめでとうパーティー』をすることになっていた。
この前の奢りだけじゃダメだったのだろうか・・・？まぁこのクラスは祭り好きなので仕方がないのだが。
それが気に食わないであろう千雨は未だにプルプルしていたのだが、それにようやくネギが気づいてしまい余計なお世話な発言をして早退させてしまった。
可愛そうだから個人的に奢ってあげて、相談にでも乗ってあげよう。
俺も９歳ではあるが、ロボがいるとか発育がおかしいとか留学生多すぎじゃね？という一般論を述べてあげたことで千雨からは俺は千雨の常識がわかる人間として差別化されているようだ。
確かにこのクラスは色々と非常識ではあるが、それは一般的に見ると非常識なだけであって、そこにあるという事実は変わらないのであるから受け入れるだけでいいはずなのである。
それでも受け入れられないのが人間らしいといえば人間らしいが。
ネギは千雨を追いかけていった様なので、俺が引き継いで解散させた。
寮の前の桜の木の下にクラスメイトといっしょに集まって話をしていると、ネギがコスプレしたままの千雨を引っ張ってきた。
うん・・・ごめんね・・・愚弟の行動は俺には止める(止められ)気がないんだ・・・あとで追加の手作りケーキも持っていくから許して欲しい。

結局最後にはネギがくしゃみ(ラッキースケベ)で千雨の衣装を吹き飛ばしていた。
もちろん俺はやっぱりたまたま持っていたコートを羽織らせて隠したのは言うまでもない。
春休みになり、俺とネギと鳴滝姉妹の４人で麻帆良を回ったり、俺とネギとアスナとこのかの４人であやかの実家に行ってプールで泳いだり、ネギはパートナーを探しに日本へやってきたことにされているのを遠目で眺めたりした。
そして俺は来るべき日に備え、龍宮に相談してスローイングナイフを何本かとハンティングナイフを見繕って貰った。

4歩目～図書館島を歩k・・・歩かない！・麻帆良学園都市は少し歩く～（後書

駆け足で2巻分全てを収録。

この話までが導入部分だったりします。
個人的にはわかりにくい伏線のようなものを散りばめてあるのですが・・・どうにも上手く伝えられていないようで、モノを書く難しさを痛感しているところであったりします。
まだ回収していないのですが・・・ｏｒｚ次回から回収していく・・・ハズです。

設定小話
刹那について、少し悪い印象を強く書きすぎているかな？と思いますが、作者もアルクもそれほどまで刹那が嫌いなわけではありません。
が、気がついたらああなっていたので、好きな子をいじめてしまう子供的な感じで認識していただければいいかな・・・と思っています。

感想・アドバイス・誤字脱字などの報告いただけると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5739z/

ネギま！を歩く～双子の兄でもネギじゃない～

2011年12月20日20時53分発行